

第三章 ポルトガル文人ペデガシエの記述・画業・探究

第一節 フランスの月刊誌『ジュルナル・エトランジエ』と

リスボン在住通信員ペデガツシエ

十一月一日は気圧計二四インチ七ライン、列氏温度計一四度（華氏一七・五度）。爽快な大気、晴朗な天空であり、午前九時四五分大地が僅かに揺れたものの、快速の四輪馬車に乗った程度に人々は思いました。こうした最初の震動が二分間続きました。それから二分間の間隔のあと、新たに大地が激しく揺れて、大半の建物が引き裂れ、倒壊し始めました。この第二の震動が約十分続きました。同時に煙塵が拡がり、太陽が陰るまでになります。それが二、三分続いたあと、きわめて濃密な煙塵が消え、たがいに顔を見合わせ、確認できるほど、太陽が明るくなりました。その直後凄まじい震動が発生し、それまで耐えてきた建物も微塵に倒壊したのです。天空がふたたび暗くなり、大地は混沌の暗闇に戻るかのようでした。

ーミグエル・テイベリオ・ペデガシエー

一、『ジュルナル・エトランジエ』の刊行とポルトガル学芸の紹介

小説『マノン・レスコー』の著者アベ・プレヴォーは一七五四年パリで雑誌『ジュルナル・エトランジエ』を発刊した。刊行の趣意書によれば、古来フランスは学問、文学、芸術に関する英知を、イタリア、イギリス、スペインなど近隣諸国から摂取してきた。とはいえ、これらの国々で日々創出される優れた作品は、ほとんど知られていない。こうした状況に鑑み、プレヴォーは発刊の意義をつぎのように述べる。

これら多数の作品を集成する難しさ、枚々たる勉勵を要する言語の相違、膨大な書物から悪しきものを選ぶ危険、こうした障害が現在まで克服されずにきた。さまざまな現代語で表現された、すべての分野における世界のあらゆる学者・芸術家の知見、発見、傑作を集成した著作があれば、フランスおよび全ヨーロッパにどれほど利益をもたらすか、ときおり人々は思索した。私たちが公衆に予告する定期刊行物の企図は、まさにここに存する。

『ジュルナル・エトランジエ』創刊号（一七五四年） ①

このような趣旨によって同誌にはフランスを除く各国の学芸が同誌に包含され、無知や偏見によって久しく排除された作品も採択される。また、従来軽視されている演劇、公文書、最新情報なども収録され、これらすべてがフランス語に翻訳される。創刊の前年プレヴォーは『ジュルナル・エトランジエ』の出版許可を王権から取得し、さらに国際的な情報網としてヨーロッパ各国に通信員と協力者を設定した。②

『ジュルナル・エトランジエ』が頒布される範囲は、「リスボンからペテルスブルクに、またロンドンからヴェネチアに至る」地域まで、購読の予約者は千余名に及ぶ。同誌に記載された予約者名簿には、筆頭に国王（ルイ一五世）、オルレアン公、コンデ公・同公妃、デンマーク国王・同王妃、プロシヤ国王、ポーランド国王・同王妃など二人の王侯が列記され、フォントネル、ヴォルテール、モンテスキュー、ダランベール、エルヴェシウス、ルソー、グリム、ドルバックなど啓蒙の哲学者、國務大臣ダルジャンソン、ポーランド大使ブロイ、租税法院院長マルゼルブ、パリ警視總監ベリエなどの政府要人、ナツソウ・ザールブリュク公妃、ポンパドゥール侯爵夫人、グラフィニ夫人などの著名な女性、オーストリア国事顧問アルベルティ、ダンケルクの卸売業ドリユー、ベルリン科学アカデミーのカホイサクなど外国人購読者が見出される。さらには多くの医家、弁護士、商人、ブルジョワ、聖職者とともに、ロンドン八三名、ベルリン二九名、フイレンチエ二五名など計一三七人が氏名不詳の購読者として記載された。一般の人々にも頒布・閲読の便宜をはかるため、フランスの地方都市やロンドン、ローマ、ワルシャワなどについては、そこに居住する協力者の名前が明記された。③

予約者名簿の豪華な顔ぶれは、プレヴォーの社会的信望と幅広い交誼の賜物であった。多くの文学作品を執筆した彼は、一七三三年から学芸の情報を伝える週報『プール・エ・コントル』*Pour et Contre* を発行し、かつまた浩瀚な『旅行記通観』全一五巻の編著でさらに世評を高めつつあった。ちなみにこの叢書には大航海時代の記録が集積され、初巻にポルトガル人カスタネダの著書『インドの発見と征服』の仏訳、第五巻から第七巻までにはチベット、中国、朝鮮へのさまざまな紀行が収録されている。遍歴と波瀾の人生ではあったが、彼はシャンティイ城主コンデ公の告解司祭をながく勤め、晩年にはローマ教皇ブノワ十四世よりルマン司教区ゲネのサン・ジオルジュ修道院長に任じ

① *Journal Eranger, ouvrage périodique*, avril 1754, Paris, p.xxxiv.

② Henri Roddier, *L'Abbé Prévot, l'homme et l'oeuvre*, Paris, 1955, pp. 184-185.

③ *Journal Eranger*, avril 1755, pp.i-xxx. mai 1755, pp.238-240.

られた。① 『ジュルナル・エトランジエ』刊行の第二年にプレヴォーは当初の企画を充実させ、読者を広い視野と豊かな教養へ導くため、自身の執筆による連載「歴史的探究」を開始した。すでに契約した各国の通信員に助力を求めながら、一月号では古代から近代に至るイタリアの芸術と学問を概観し、翌月にはとりわけトスカナ地方の美術や文学について論究がなされた。ついで三月号にはポルトガルの文化について詳しい論述が掲載される。

リスボンにおける本誌通信員のひとり、祖国の名誉をも真理も探究をも熱望する人物が、私たちに寄せた覚書のなかで快く真情を吐露した。学問の隆盛が長きにわたる幸福な国々に較べ、ポルトガル文学の黎明はそれほど遠く遡ることを要しない、と。彼はふたつの理由を示し、そこには誠意が感じられた。その第一はポルトガル国王が手薄な保護しか学芸に与えないことである。また、第二には異端審問が惹起した恐怖の深淵であつて、これこそ魂を麻痺させ、理性を真の隷従に繋ぐものである。

しかし、この明敏な通信員は自国の学芸の現状を安易に糾弾するのではない。個別的な名前や事象を挙げて、それらがやはり大半のヨーロッパ諸国でも尊重も奨励もされていないことを明らかにする。フランスとイギリスも例外ではない。彼によれば、揶揄は有害であり、阿諛は卑劣である。利害に捉われず、宗派に立たぬ判断を、祖国に下したいと彼は望む。

ジョゼ一世の統治が栄光の時代の暁を告げた。この偉大な君主は学問と芸術を尊重し、保護した。彼は褒賞を設けて、競争心を喚起した。われらの歴史家は詩的に言い添える。大地の神々が文芸の隆盛へ導いたのは、そのときすべてが神意に合致したからだ、と。武力と学問によつて臣下が全ヨーロッパを支配するようルイ大王は望み、みなはそれに従った。数年でピエール・アレキサンドロヴィッチは未開の民族を学問に秀でた文明国民に変えた。そこに存するペテルブルグ王立アカデミーの提供によつて、リスボンの王立アカデミーが学殖豊かな著作の輝かしい証左を受理したのである。エリセイラ伯爵がドン・フランソワ・ザビエル・メネセスが自国語による貴重な抜粋でそれを普及させた。ポルトガルの文芸が、それを愛好し、褒賞によつて奨励する偉大な国王のもとで、どうして発展せざるに置かれるようか。

『ジュルナル・エトランジエ』 一七五五年三月号

②

通信員より提供された情報に依拠しながら、プレヴォーはまずポルトガルにおける言語学と詩学を概観し、ついで六人の哲学者、デカルトの動物精魂説を連想させるゴメス・ペレイラやローマで名声を得たアントワーヌ・ヴェルネについて論述される。また、歴代の国大生はとくに数学を奨励し、新たな学院を創設する一方、卓越した学者エマヌエル・ダ・マヤの講義をみずから受けた。以下「歴史的探究」におけるポルトガル紹介は、法学、歴史、神学、雄弁術、文学、軍事学を包摂し、二四頁の長文に及ぶが、ここでは参考までに医学の状況に関する記述のみを引用する。

解剖学と外科学については、ふたつの学問の発展が相互に依存するものの、ポルトガルでは僅かに開発されたのみである。医学および外科学によつて解剖学がいかに肝要であるかを、ドン・ジュアン五世は認識され、リスボン病院に講座を開いて、創設期の講義のためイタリアからサンテュチ氏を招聘した。この教授が逝去したあと、カタロニア人モン・ラバトが講座を引き継ぎ、新たな希望を抱かせた。しかし、現在までポルトガルはかくも有益な基金の成果

① Abbé Prévost, Avertissements de l'histoire Générale des Voyages. dans *Oeuvres de Prévost*, Grenoble,

1985. tome VII, pp.400-401, 408-409, 418-419. Henri Roddier, *op.cit.*, pp.37-38, 47, 142-144.

② *Journal Eranger*, mars 1755, pp.3-4.

をあまり活用していない。相変わらずこの国の内科医と外科医は、己れの領域で完璧な域に達したと過信している。危険な自惚れであつて、みずかわの進歩を遅らせるにすぎない。とはいえ、内科医には診断が、外科医には技術が必要であつて、解剖学への関心も芽生えたいま、ガリエンによつて〈心眼〉と名づけられた認識、久しく等閑にされた認識を身に付ければ、こうした学問の発展をなにごとも妨げはしないと期待できる。「原註」一般にポルトガルの内科医は慢性的な病気よりも急性疾患の治療に成功するが、その原因を示すことは難しい。

なお、こうした判断で例外とされるのは、若干のポルトガル人であつて、幸運にも外国で習得した学識をも活かし、彼らは自国の医学にも貢献したのである。この種のとくに偉大な医家のひとり、サンチエス氏はロシア宮廷で卓越した存在としてながく認められ、幸ある老境にはパリへきて、名声を博した。

〔原註〕現在は二つの都市、リスボンとコインブラに解剖学の講座が置かれる。

同書 ①

同年の八月号でプレヴォーは刊行者の任務をエリー・カトリヌ・フレロンに引き渡すと宣言し、同誌編集の方針はいささかも変らぬと確約した。後者は同じ時期にみずから開始した『文芸年報』*L'Année littéraire*の刊行によつて、啓蒙思想の宿敵として後世に伝えられる。しかし、後継者を推挙するにあつてプレヴォーは、種々の作品を著した名高い文筆家、知性と学識と雅趣を要する企画に適切な人材と語っている。②

二、通信員ペデガツシエによるリスボン大地震の記録

ポルトガル在住の通信員ミグエル・テイベリオ・ペデガシエは、多芸多才な人物として知られ、戯曲や伝記を書き、画筆を握るとともに、一七五三年十月二六日には日蝕を観測した。彼の両親はバスク出身でリスボンで卸売を営むピエール・バプチストと、砲兵大尉の美しい娘ドロティア・マリアである。巫女力をマリアは秘めたとの伝説があり、彼女の靈感によつて多くの井戸も掘り当てたとされる。③「歴史的探究」に素材を提供したポルトガル通信員に関して、プレヴォーは氏名を書き添えていないが、語学にも堪能な頒布者協力者ペデガシエであろうと推察できる。ちなみにリルボンにおける購読予約者は彼の父ピーエールをはじめ、貴族デ・バロス、閣僚デ・ラ・セルダ、神父アベ・ガルニエ、さらに氏名不詳の三二名とされ、ペデガシエ以外の通信員は誌されていない。

新たな刊行者フレロンをも支援すべく、ペデガシエは自国の習俗や産業について筆耕を続けたと思われる。そのときリスボンの大震災が襲来し、彼の草稿もまた消え失せた。ここに訳出するのは地震発生の日目にフランス語で書かれ、『ジュルナル・エトランジエ』一七五五年十一月号に掲載された書簡の全文である。

ポルトガル通信員から本誌特別会員クルセル氏への書簡

一七五五年十一月十一日、リスボンにて

ペデガツシエ

拝啓。ポルトガル全土と住民の大半が犠牲になった災厄。これを描写できるほど強烈な筆墨を私は持つておりません。私たちに対して地水火風が連合し、私たちを破滅させるべく競い合うと想像してください。こうした絵図をいかに怖ろしく描こうと、真実には程遠いのです。しかし、詳細な情報が皆様に必要であり、この破局を努めて記述し

① *Journal Etranger*, mars 1755, pp.13-15.

② *Journal Etranger*, août 1755, pp.4-6.

③ Jean-Paul Poirier, *Le Tremblement de terre de Lisbonne*, Paris, 2005. pp.18-21.

ましよう。

十一月一日は気圧計二四インチ七ライン、列氏温度計一四度（華氏一七・五度）。爽快な大気、晴朗な天空であり、午前九時四五分大地が僅かに揺れたものの、快速の四輪馬車に乗った程度に人々は思いました。こうした最初の震動が二分間続きました。それから二分間の間隔のあと、新たに大地が激しく揺れて、大半の建物が引き裂れ、倒壊し始めました。この第二の震動が約十分続きました。同時に煙塵が拡がり、太陽が陰るまでになります。それが二、三分続いたあと、きわめて濃密な煙塵が消え、たがいに顔を見合わせ、確認できるほど、太陽が明るくなりました。その直後凄まじい震動が発生し、それまで耐えてきた建物も微塵に倒壊したのです。天空がふたたび暗くなり、大地は混沌の暗闇に戻るかのようでした。生き残った者の涙と叫び、死に瀕する者の苦しみと哀願、大地の揺れと闇の世界が、恐怖と不安を募らせます。しかし、二〇分後にすべて静かになりました。すぐさま脱出し、田舎に避難しよう、とだれしもは思います。だが、災厄はまだ峠にも達していません。人々が一息つく間もなく、首都のあちこちで炎が現れ増した。強烈な風がそれを煽り、いかなる希望も許しません。火炎の勢いをだれも止めようとしません。なおもたえず地震が続き、人々は自分の命を護ることしか考えません。あらゆる様相で剥き出しになった亡骸に彼らは囲まれており、実際には微弱な地震でも過度に強烈と感じるのです。

首都の水没という海の脅威がなければ、火災に対してなんらかの対処を採れたかもしれません。動転した民衆、すくなくとも彼らは海から遠く隔てた地域、海からの浸水を到底予想できない地域にまで、怒濤が押し寄せるのを見て、すぐにそう考えました。

若干の人々は海上のほうがむしろ安全と信じ、そこに逃れました。しかし、軍艦、船舶、小舟が巨浪によって地底に薙ぎ倒されて、相互の衝突で微塵に砕け、なおも凶暴に引き戻されて、水の犠牲者もろともそこに呑み込まれます。この上げ潮と退き潮は日中のすべてと夜間のほとんどで続き、五分毎に勢いが増すように感じられたのです。

こうした日々の間恐怖心はいちども消えませんが、十一月七日金曜の午前五時非常に激しい揺れがあり、災厄がふたたび始まるのかと思ったほどでした。厄介な破目にはならず、震動が規則的なので、出て行く船にも似ています。地震の最初の日甚大な被害を惹き起した地震では、すべての揺れが逆の方向へ働き、真つ向からの衝突によってきわめて簡単に牆壁が割れました

きわめて大きな揺れが極光の始まりに生じることに、私は気づきました。ポルトガルで記憶された最大の氾濫、九フィートを海が乗り越えたと、人々は確信しています。リスボンにおける死者の数が正確にはまだ判りません。三万人から四万人に達するであろうと推測されています。なぜなら、民衆が満ち溢れたすべての寺院が倒壊し、祈祷を捧げきたか、怯えて避難したほとんどすべての人が、瓦礫の下に葬られたからです。

十一月二日の朝テージュ河がところにより幅八マイル（約十二キロ）を超え、首都の乾燥地帯にまで迫るのを見て、私は驚倒しました。片側の地帯では水底を見通せるほどの浅い溝が出現したのです。

ポルトガルのほとんど全土が災害に見舞われました。アルガルヴ王国、セツヴァル、ポルト、アレンケル、美しい教会を破壊されたマフラ、オビドス、カスタンヘイラ、周囲八十マイル（約一二〇キロ）にわたるすべての都市が、壊滅に近い状態となりました。

以上のように命がけで私は危地を脱出しました。なぜなら、家財や宝石や銀器やそのほかなんでもあれ、私のあらゆる財産は、完全に焼き尽された自邸の石と灰の下に埋もれたのです。厳選された三千巻の蔵書で、学芸共和国で栄誉を博した私の著作も失いました。しかし、もつとも残念に思うのは稀覯本の大量喪失で、そこには貴重な手稿四十冊のほか、ポルトガル人の習俗、習慣、謬見、研鑽、さらにはポルトガルの工場、治安、政体に関する書簡体著述が含まれます。これこそ六年に及ぶ勉強と省察の成果であり、ポルトガルへの歴史的論究、モレリ辞典のポルトガル関連項目に対する批判的検討、そして自己の天文学的な考察や月の大気についての論究など、さまざまな題目への専門的論文をも含むのです。とはいえ、今回の悲劇的な出来事によって私が失った十萬エキュに較べれば、これは軽度の損失にすぎません。

住む家がないため、田舎の真中で私は皆様への書簡を綴っております。リスボンは消滅し、これまで位置した地域にもはや再興できません。夏には宮廷を営み、離宮を所有される近郊ベレンに、国王が新たなリスボンを建設されるものと信じます。

どうぞそちらの情報をお知らせください。災厄に襲われても皆様との交流をけつして冷却させず、変わらぬ熱意と献身をもって『ジュルナル・エトランジェ』への協力を続ける所存です。敬具。

『ジュルナル・エトランジェ』一七五五年十二月号 ①

ここに付記された日付のとおり、ペデガツシエの記録は地震発生の日付に發送され、震災の基本的史料とされる史官モレイラ・ド・メンドンサや学僧フィゲイレドの著述よりも格段早い時期に執筆された。震動の様相と大気の異変を克明に誌すのに加え、ポルトガル人としては珍しく、津波の襲来についても貴重な証言を含んでいる。さきに列記した『ジュルナル・エトランジェ』購読者一覧から判断して、この記録がフランスの貴顕や文人の間に広く読まれたと推察できる。

初稿：二〇一二年一月二三日

改稿：二〇一九年八月二四日

① Miguel Tiberio Pedegache Brandao Ivo, Lettre du Correspondant du Journal Etranger écrite à Lisbonne dans *Journal Etranger*, décembre 1755. pp.235-239.